

恋愛についてどのように語るか

——クレチヤン・ド・トロワ『クリジェス』

植 田 裕 志

クレチヤン・ド・トロワの『クリジェス』¹は、「恋愛を発明した」と言われる12世紀西欧の代表的な恋愛ロマンスの一つであり、その恋愛心理、とくに「恋のめばえ（生まれようとしている恋）」（l'amour naissant²）の心理の描写でよく知られている（本稿ではフランス語で“amour”というところを、コンテキストに従って適宜、「恋愛」、「恋」、「愛」という語を使って論じる）³。

物語の時代はかのアーサー王の時代、といっても舞台の中心はコンスタンティノーブルにあって、皇子アレクサンドル、次いでその子クリジェスと、順番に2代にわたる若きヒーローのそれぞれの恋の物語が彼らの騎士としての活躍とともに語られる。とくにクリジェスについては、皇帝である叔父アリスの妻、すなわち皇妃フェニスと恋仲になるのであって、まさにかのトリスタンとイゾーの場合と同じ状況がここでも描かれる。不倫の関係にある恋人たちはどのように困難を克服するのか、クレチヤンはベルールやトマのトリスタン物語に対して自分なりの恋愛観・結婚観を示すべくこの『クリジェス』を書いたと言われる。

クレチヤンがこの作品で、アレクサンドルとソルダモール、ついでクリジェスとフェニスの二組の恋を描くにあたり、どのような伝統に従い、またどのような先行作品に学んだかについては、すでに以前から指摘されているところである。ベルールやトマのトリスタン物語はもちろんのこと、オウィデイウスの伝統や古フランス語版『エネアース』のような古代もの、トルバドゥールやトルヴェールたちの抒情詩、そして中世の修辞学や弁証法、さらには告解（*confession auriculaire*）の普及などが挙げられている⁴。

しかしそうした中世文学史の流れの中でこの作品を位置づける視点とは別に、もっと広く多面的に、およそ恋愛というおそらく人間に普遍的な現象について、小説がどのような言葉で語ってきたのかという関心からこの作品を考察することもできると思われる。たとえば、素朴な例をあげれば、ある時代のある言語の小説について、男は女に（あるいは女は男に）どのような言葉で自分の気持ちを告げるのか、と問うことができる。あるいはまた、登場人物が口に出さずとも自分の思いを何らかの表情や態度で示しているならば、語り手はその場面をどのように語っているかと問うこともできよう。そうした問いはおおまかに言っても、ストーリーそのもののレベルから、ディスクールのレベル、そして単語のレベルまでであろうが、いったいどれだけの問いを立てることができるであろうか。ある作品と別の作品を比較するには、どれだけの視点から考察することができるであろうか。

『クリジェス』は当時の文学作品としてはスタンダードな形式、8音節平韻の韻文のフランス語で書かれてあって、韻文ゆえの修辭的技術も駆使されている。したがってこの文学フランス語は、当時の日常フランス語とちがっているはずであるのももちろんである。が、むしろこの文学的伝統にもとづく恋愛観が近代西欧を経て、おそらく近代の日本へも影響を与えたに違いないことを思えば、『クリジェス』は興味深いテキストであると思われるのである。

本稿では、こうした問題意識からまずストーリーとディスクールのレベルで考察する。

1. ふたつの恋の状況

まず、『クリジェス』で語られる二つの恋の主人公たちを確認しておく。はじめにアレクサンドルとソルダモール。アレクサンドルはコンスタンティノープルを首都とする帝国（いわゆるビザンツ、ただし作品ではギリシア）の若き皇子で、もうすぐ騎士叙任を受けようかという年齢（あとのクリジェスに関する記述からこちらも15才ほどか）。実際、物語では武者修行に赴いたアーサー王のもとで目覚ましい働きを見せてアーサー王から騎士叙任を受ける。相手のソルダモールはアーサー王宮廷の騎士ゴーヴァンの妹とあり、本作品ではとくに記されていないが、アーサー王物語の世界ではゴーヴァンはアーサー王の叔父であるから、ソルダモールはアーサー王の姪にあたる。また王妃（この作品ではいつも「王妃」とあってグニエーヴルの名前がでてくることはない）のそばに仕えており、おそらくいわゆる結婚の適齢期を迎えたばかりの「お嬢様」（*damoisele*, 449行）、「乙女」（*pucele*, 2310行）である。

次にクリジェスとフェニス。クリジェスはアレクサンドルとソルダモールの子で、クリジェスを主人公とする物語は、アレクサンドルとソルダモールの死後、クリジェスが「15歳になろうか」（*avoit près de quinze anz* 2747行）という時点ではじまる。ギリシアの皇帝位にはアレクサンドル存命中からアレクサンドルの弟のアリスがついていたから、クリジェスはこの皇帝アリスの甥ということなる。クリジェスも物語に登場した時はまだ騎士叙任前であったが、こちらもすぐに敵方との戦いで武勲をあげ、ザクセン公との決闘を前にして叔父アリスから騎士叙任を受ける。相手のフェニスの方は、ドイツ皇帝の娘であり、先にザクセン公と結婚の約束のあった乙女（*pucele*, 2697行）であったが、その婚約は破棄されて、ギリシア皇帝アリスが妃として迎えようとドイツ皇帝の宮廷を訪れたところで物語に登場してくる。

以上のように、2組の男女は、申し分ない家柄身分の貴族の若者であり、当時の常識からすれば、恋をして結婚をするにふさわしい年齢である。男の方は武勇にすぐれること、その戦いぶりがたびたび描写されている。もちろんそれが高い身分の美しい女性と恋をするための男の前提条件である。そしてこれも決まったように、4人ともそろっての美男と美女。ソルダモールについてはアレクサンドルがモノローグのなかで彼女の髪や額ひとつひとつを挙げて美しさをたたえる（788-843行）。クリジェスについては語り手がその美しさはかのナルシスをもトリスタンをも凌ぐと讃えている（2749行、2772行）。そしてフェニスについては、これも語り手が、おおげさに

「たとえあと1000年生きることができても」(“se mil anz avoie a vivre” 2720行)、彼女の美しさを「描くことはできない」と修辭を使って言っている。

二組の恋の始まりはどちらも同じである。それまで恋を知らなかった男女が初めて出会い、視線を交わした時から互いにひそかに思いを寄せる。相手の眼差しに出会う喜びは感じながらも、思いを言い出せぬどころか、気軽に話をすることもできずに悩み苦しむ。そしてここから二組の恋の進行は異なってくる。

アレクサンドルとソルダモールの場合には二人の恋に障害となるものはない。やがてアーサー王妃グニエーヴルが二人の恋に気づき、内気な二人の間に立って、結婚を勧める。その日のうちに二人はアーサー王宮廷の人々に祝福されて式を挙げ結ばれる。出会ったのが、アーサー王一行の一員としてブリタニアからブルターニュへ向かう船の中で、その後「10月の始めに」(“a l'entree d'oitovre” 1051行)ブリタニアへ戻り、謀反軍征伐後に、告白・結婚となるから、出会ってから結婚までせいぜい一年足らずというところであろう。

クリジェスとフェニスの場合には事情が複雑である。初対面の時、クリジェスにとってフェニスは自分の叔父アリスの婚約者であった。二人はひそかに思いを寄せるが、互いの気持ちを知らぬまま、フェニスはアリスと結婚する。するとクリジェスの恋は、自分より身分の高い既婚女性を愛するというまさに「宮廷風恋愛」(amour courtois)の典型であり、しかも相手は叔父の妻であって皇妃という、さらに困難な条件の恋である。また、相手が、自分の叔父の妻、その叔父が一国の支配者という点で、クリジェスはトリスタンと同じ立場にある。トリスタンの場合、相手のイズーは叔父マルク王の妻、王妃であった。ただし、イズーが夫のマルクとも愛人のトリスタンともベッドを共にしたのと違い、フェニスは、自ら「イズーのようにはなりたくない」と言うように、養育掛テッサラが処方した魔法の飲み薬を夫アリスに飲ませ、アリスを騙して身を乙女のままに保つ。

クリジェスはおそらくフェニスへの思いは秘めたまま、ブリタニアへ行き、アーサー王に武勇を認められる。王とともに「また夏になると」(“novel tans d'esté” 5049行)フランスの各地で活躍する。武勲をあげながらも、遠いギリシアにいるフェニスを忘れられず思い出す、この思いは、トルバドゥールの抒情詩のテーマである「遙かなる恋」(amour lointain)に他ならない。やがてクリジェスはギリシアへ帰り、再会した二人は互いの気持ちを知る。と、初対面から告白までせいぜい1年か2年というところ。

二人はそのまま逃げようとはせず、フェニスが再びテッサラの薬を使って病死を装い、世間をだますことにする。フェニスは仮死状態でいったん埋められたあとを助けられ、ようやく秘密の城の中で二人は身も心も結ばれて幸福な日々を過ごす。15ヶ月以上(“Plus a de quinze mois antiers”, 6345行)も過ぎて夏になり城の中の庭園に出るようになったところで秘密が露見し、二人は皇帝アリスの配下の者たちから追われ、アーサー王のもとまで逃れる。クリジェスのためにアーサー王が大船団を率いて出航しようというときに、都合よくアリスの狂死の報がもたらされると、二人は平和裡に帰国し、正式な夫婦、新しい皇帝夫妻と認められる。逃亡から帰国まで

テンポよく語られていくので、これもそう時日を要したとは思われない。

クレチヤンはアレクサンドルとソルダモールによって、まず典型的な恋のプロセスを描いている。まず眼差しの交換に喜びを感じ、それが相手を思う気持ちであると自ら認め、さらに愛する意志を持ち、そして勇気を出して思いを告白し、そこでお互いの気持ちが確認される、すなわち二人だけの心の結びつきが確認されたことになる。そこでつぎに結婚という形で体の結びつきも叶えられて恋は完成する。クリジェスとフェニスの場合、ここに姦通関係が加わる。ただし、フェニスは夫アリスとの間に心の結びつきはもちろん、体の結びつきも持たない。そうした状況でクリジェスとフェニスの二人は心の結びつきを互いに認める。しかし、ここですぐそれが体の結びつきとならず、フェニスがいったん「死ぬ」ことで夫アリスとの結婚を解消してから体の結びつきとなる。そして都合よくアリスが死ぬことで正式に結婚することができる。

この『クリジェス』において、クレチヤンが、たとえば、男にとっては独身の女性よりも既婚の奥方との恋の方を讃えるべきであるかとか、結婚と恋愛はどちらが優先するのかどうかといった問いに明確に答えているとはいえない⁵。確かなことは、心も体も一人の相手だけにしか与えてはならないという主張である。

2. 恋愛について語られる場面

こうした二つの恋の物語は、語り手が、そして登場人物たちが、恋する人間の様子や心理について描写・説明し、あるいはまた恋愛というものについて語りながら進行してゆく。数十行にわたるモノローグもあれば、語り手のちょっとした描写や指示表現にも恋する者たちの思いや、彼らの関係が読み取れる。まず比較的まとまった記述に注目して、それがどこにでてくるか、物語の進行に沿ってリストにすると以下ようになる。

略号 N.: 語り手、S.: ソルダモール、A.: アレクサンドル、R.: 王妃、
C.: クリジェス、F.: フェニス、T.: テッサラ

(下線を施したところは比較的長い4つのモノローグ、数字はWalter版の行数)

I アレクサンドルとソルダモールの恋

1. ブルターニュへ向かう船の中で

- ① N. (442-472) 恋を蔑んでいたソルダモールは愛の神の矢を受けていた
- ② S. (473-521) 「私は恋しているのだろうか」
- ③ N. (522-561) 二人とも知らぬ間に恋の病に苦しむが、王妃は船酔いのせいと思った

2. ブルターニュ到着後

- ① N. (570-623) およそ打ち明けられぬ思いはますます募るもの
- ② A. (624-870) 「私の恋の病は治すことはできない」
- ③ N. (874-894) ソルダモールの恋の苦しみ
- ④ S. (895-1044) 「私は愛している。が、私から打ち明けることはできない」

3. 最初の戦いの後、アレクサンドルが王妃の天幕（ソルダモールもいる）を訪れる
 - ① S. (895-1044) 「アレクサンドルに何と呼びかければいいのか」
4. ウィンザー城攻めの後、アレクサンドルが王妃の天幕を訪れる
 - ① N. (1552-1628) 王妃は二人の恋に気づき、金髪が縫いこまれたシャツのことを明かす
 - ② N. (1629-1640) その夜、アレクサンドルはシャツを抱きしめて涙する
5. アングレス勢を倒した後、アレクサンドルが王妃の天幕を訪れる
 - ① N. (2236-2262) 王妃は二人が愛し合っていると知っていた
 - ② R. が A. に (2263-2294) 「黙っているままでは相手を苦しめ、死なせてしまう」
 - ③ A. が R. に (2297-2313) 「私自身をソルダモールにゆだねます」
 - ④ N. (2314-2233) ソルダモールも同じ気持ちであることを言葉と態度で示す
 - ⑤ R. が A. に (2236-2331) 二人が結ばれることを宣言する

II クリジェスとフェニスの恋

1. ドイツ皇帝の宮廷で二人が出会う
 - ① N. (2696-2836) 初対面のときから二人はひそかに思いを寄せる
2. クリジェスがザクセン公の甥と戦う
 - ① N. (2873-2895) 戦うクリジェスをクリジェスと知らずに愛するフェニス
 - ② N. (2940-2946) 勝利したクリジェスとフェニスが視線を交す
3. フェニスとテッサラの会話
 - ① N. (2960-2995) フェニスは戦いの勝者がクリジェスであったと知って喜ぶ
 - ② F. と T. (2996-3177) テッサラはフェニスが恋していることを見抜き、それを教える
フェニスはアリスと結婚しなければならない悩みを訴える
4. クリジェスが誘拐されかけたフェニスを救出し、連れ帰る
 - ① N. (3689-3789) 愛する者のために戦うクリジェス
 - ② N. (3803-3898) 互いに思いを打ち明けられないまま帰る二人
5. クリジェスがザクセン公と戦い、勝利する
 - ① N. (4035-4091) 戦いを見ているフェニスは心配のあまり気絶する
6. クリジェスがブリタニアへ旅立つ前にフェニスに暇乞いをする
 - ① N. (4276-4290) クリジェスが弱々しい姿でフェニスの前に現れる
 - ② C. (4299-4913) 「私はあなたのもの」
 - ③ N. (4314-4320) 二人は互いに思いを打ち明けぬまま別れる
7. ギリシアへ来たフェニスとブリタニアへ来たクリジェス
 - ① N. (4325-4396) フェニスは別れ際のクリジェスの一言を支えとして生きる
 - ② F. (4396-4560) 「クリジェスの言葉は愛によるものか、追従によるものか」

- ③N. (5055-5094) クリジェスはフェニスを忘れられず、故国へ急ぐ
8. クリジェスが帰還し、皇帝たちの前でフェニスに再会する
- ①N. (5109-5115) 二人は抱擁も接吻もできなかった
- ②N. (5109-5115) クリジェスは拒絶を恐れていた
9. フェニスの部屋で二人きりで話す
- ①C. と F. (5162-5264) 「私の心は遠いあなたのそばにあった」
「私の心も体もあなたのもの」
10. フェニスの部屋でこれからのことを話し合う
- ①F. がC. に (5293-5352) 「私はイズーのように誹られたくない」
11. フェニスがテッサラに相談する
- ①F. (5398-5419) 「私は彼を望み、彼も私を望んでいる」
12. クリジェスがフェニスが本当に死んだと思いつく
- ①C (6220-6247) 「あなたの命は私の体の中で生きている」
13. 二人は秘密の城で暮らす
- ①N. (6318-6328) 二人の望みはおなじ、二人はひとつだった
14. アリスの死後、二人は帰国し正式に結婚し、皇帝の位を継ぐ
- ①N. (6737-6743) フェニスは奥方であり恋人であった

作品全体は6768行で、およそはじめの3分の1がアレクサンドルとソルダモールの物語にあてられ(アレクサンドルに続いてソルダモールの死が語られる2612行まで)、残る3分の2ほどがクリジェスとフェニスの物語となる。ただし、恋愛や恋愛の心理について語り手や登場人物が多く語るのは、どちらの恋についても、お互いの気持ちが確認されるまでのことである。したがって、クリジェスとアリスの恋について、告白の場面以後、物語としては「偽装死」のたくらみに始まってさまざまなきごとが連続するが、二人の恋について語られることはほとんどない。

3. 語り手

『クリジェス』の語り手は饒舌である。それは登場人物たちの動作、心理について、読者にわかりやすく描写・説明するという点でもそうであるし、また恋愛について語り手が長々と論じるという点でもそうである。現代の恋愛小説の読者であれば、登場人物のちょっとした仕草や言葉の端々などから恋の兆しを自分で読みとることを好むであろう。そういう読者からすれば、『クリジェス』では語り手がはじめてから誰々は恋していると教えてくれる。だいたいクレチヤン・ド・トロワという作家はほかの作品でもそうしたスタイルで物語を書いているのだが、とりわけ恋愛心理を主題とする『クリジェス』ではその特徴が顕著になる⁶。

語り手は、アレクサンドルとソルダモールの出会いの場面は語っていない。フランスへと渡る

アーサー王の船に、アレクサンドルとそしてソルダモールがいたと、そこでソルダモールを物語にはじめて登場させる時、まず「恋を蔑んでいた」(“desdaigneuse estoit d’amors”, 444行)などと彼女を紹介した後、すぐに彼女が恋をしていたことを語っている(「愛の神はまっすぐ彼女を狙った。その矢で彼女の心(心臓)を射た」“Bien a Amors droit assenee: / El cuer l’a de son dard ferue.” 458-459行)。そしてそれを確かめるように、恋に苦しむソルダモールのモノローグが続く(473-521行)。このモノローグの後、語り手は「神よ! 他方でアレクサンドルが彼女に対してどう思っているか彼女が知っていたら」(“Dex, c’or ne set que vers li panse / Alixandres de l’autre part!” 528-529行)、「なぜなら……互いに愛しあい、求め合っているのだから」(“Car li uns l’autre ainme et covoitte” 533行)と、「愛する」(aimer)、「求める」(convoiter)のような言葉で、アレクサンドルの気持ちも語っている。

クリジェスとフェニスの恋についても語り手が先に二人の思いを語るという点は同じである。しかしこちらの場合は語り手は二人の初めての出会いの場面を描写している。すなわちドイツ皇帝の宮廷でドイツ側とギリシア側の一同が集う中、語り手は、まず「クリジェスはこっそりと愛をもって眼を彼女に向けた」(“Clygés par amors conduit / Vers lui ses ialz covertemant” 2782-83行)、そして「彼女は追従ではなく、誠実な愛をもって、彼女の眼差しを彼に向け、そして彼の眼差しを受け入れた」(“Par boene amor, non par losange, / Ses ialz li baille et prant les suens.” 2790-91) というように。ここではアレクサンドルたちの場合のように「愛する」というようなそのままの言葉ではなく、眼差しの交換という動作の描写によってであるが、「愛をもって」(“par amors”)、「誠実な愛をもって」(“par boene amor”) とあるように、出会いが互いの恋の始まりであることをはっきりと説明している。

このように語り手は、恋する者たちの顔色や表情などの体の変化、細かなあるいは激しい動作を描写し、そして内面の心理と感情をそのまま言葉で説明する。たとえば恋を知ったソルダモールが眠れぬ夜を過ごすさまを次のように描写する。

愛の神が彼女の心の中に閉じこもり、葛藤と激情が彼女の気持ちを激しく揺さぶり、彼女を苦悩させ、痛めつけるあまり、彼女は一晚中涙して嘆き、体を投げ出し身震いし、もう少しで心臓が止まるかというほどだった(“Amors li est el cuer anclose, / Une tançons et une rage / Qui molt li trouble son corage, / Et qui l’angoisse et destraint / Que tote nuit ploie et se plaint / Et se degiete et si tressaut / A po que li cuers ne li faut,” 876-882行)。

アレクサンドルとソルダモールが互いに相手に思いを伝えられずにいることを語りながら、恋する者一般の心理について講釈を始める。

互いに見ることはできてもそれ以上に話をするのもほかの何もすることができないことは二人にとってとてもつらいこととなり、それが愛を大きくし、火をつける。しかし、恋する者というのはいずれも、

ほかにしようがないので、(相手の) 眼差しで自分の目を満足させようとする。そして、恋が生まれ成長するものになるものが自分にとって快いので、それがとうぜん自分の助けになると考えるものだが、それは彼らを苦しめるのである。(“Et ce que li uns l'autre voit, / Ne plus n'an puet dire ne feire, / Lor torne molt a grant contraire / Et l'amors acroist et alume; / Mes de toz amanz est costume / Que volantiers peissent lor ialz / D'esgarder, s'il ne pueent mialz, / Et cuident, por ce qu'il lor plest / Ce dont amors acroist et nest, / Qu'aidier lor doie, si lor nuist.”, 586-595行)

こうした描写や説明には、「愛の神」や「愛の神の矢」による表現はもちろんのこと、さまざまなメタファーやたとえが使われる。たとえば、今、挙げた箇所では、相手に言えぬ思いを、さらに「灰の中の炭火」にたとえている(“charbon qui est soz la cendre”, 603行)。初対面のクリジェスとフェニスが、「めいめいが二人に共通の心を持っている」(“chascuns a le cuer as deus”, 2821行) ことは「ユニゾンで歌う」(“chanter a une concordance”, 2827行) のと同じことだと説明する。ザクセン公の甥との戦いに勝利したクリジェスがフェニスの近くを通りすぎる場面では、「そこには門の入り口でやさしい眼差しという通行料を受け取る女性がいた」(“Oucele estoit qui le passage / A l'entrer de la porte prant / D'un dolz regart”, 2942-2944行) というように、クリジェスがひそかにフェニスを見やる様子を描写している。

語り手は饒舌なあまり、クリジェスとフェニスの初対面の場では、語り手自らに問いを発している。いわゆる語り手(ないし作者)の物語への介入である。

彼女が自分の目と心をそこ(クリジェス)に置くと、こちらはこちらで彼の心を彼女に約束した。約束しただって? いやすべて与えるのである。与えただって、誓ってそんなことはしていない。私は嘘を言っている。だれも自分の心を与えることはできないのだから。だから私は別の言い方をしなければならぬ。(“Ses ialz et son cuer i a mis, / Et cil li ra son cuer promis. / Promis? Qui done quitemant! / Doné? Ne l'a, par foi, je mant, / Que nus son cuer doner ne puet; / Autremant dire le m'estuet. 2799-2804行)

この語り手の口調は、後述するが、実は恋に悩み苦しみながら自問自答するソルダモールやアレクサンドルと同じ口調になっている。

とりわけ語り手の介入が顕著な場面、それは、誘拐されかけたフェニスをクリジェスが救出し、二人で無言のまま馬を並べて味方の城へ帰る場面である。その直前には勇猛果敢な騎士ぶりを発揮したクリジェスが、か弱き乙女フェニスの前では拒絶を恐れて話しかけることもできない、こうした本来の強い者と弱い者の立場の逆転を、それはまるで「犬がウサギから逃げる」ようなものだ、に始まって、「ビーバーと鱈」、「狼と羊」、「鶯と鳩」、「農民と鋤」、「鷹と家鴨」、「禿鷹と鷺」、「カマスとハヤ」そして「ライオンと鹿」と、一連の組み合わせを列挙して強調している(3833-3841行)。そしてここで語り手は読者(聴き手)に訴える。

皆様方、愛の神についての物識りであり、その宮廷の慣例ときまりとを誠実に守り、何があろうともその法に違反したことはない皆様方、教えてください、愛ゆえに喜ばせてくれる人を、身震いしたり蒼ざめたりすることなく見ることができるものかどうか。このことについては誰も私に反論できませんまい、私がきつと言い負かすでしょう。(Vos qui d'Amors vos feites sage, / Et les costumes et l'usage / De sa cort maintenez a foi, / N'onques ne faussastes sa loi, / Que qu'il vos an doie cheoir, / Dites se l'en puet nes veoir / Rien qui por Amor abelisse, / Que l'en n'an tressaille ou palisse. / Ja de ce contre moi n'iert nus, / Que je ne l'en rande confus. 3849-58行)

そして語り手は今度は恋する二人を主人と従僕にたとえ、良き従僕は主人を恐れて当然だと言う。そこからさらに、不安と恐れのない恋愛は「燃えながら熱のない火」、「太陽のない昼間」、「蜜のない蠟」、「花のない夏」、「霜のない冬」、「月のない空」、「文字のない書物」のようなものだと、またたとえを並べている。

このクリジェスとフェニスが互いに思いを口にできず無言のまま馬を並べて自軍のもとへ帰る場面、現代の読者であれば、もっとほかに語りようがあるだろうにと惜しむであろう。情景の描写はともかく、せめて二人の動作、しぐさ、表情なりともここで描写して二人の思いをそれとなく読者に感じさせることができるだろうにと。しかしクレチヤンは、むしろここぞとばかりにたとえを並べたてて恋愛についての講釈をしているのである。

してみれば、かつて19世紀に、中世文学研究の祖といわれる G. Paris (1839-1903) が、『クリジェス』についてまとめた文章を書いたとき、たとえばこの「犬とうさぎ」以下の動物の組み合わせの列挙をとりあげて、恋においては強弱の立場が逆転するというせっかくの考えをクレチヤンはむしろ台無しにしていると批判しているのも当然かと言え⁷。後でも取り上げるが、G. Paris はしばしばクレチヤンの書き方に辛い評価を下している。しかしそれは G. Paris がフランス古典劇の理念のようなものの基準から中世文学作品を評価しようとしていることを表している。むしろ、G. Paris の反応は、19世紀の文学研究者の好みを示すものとして興味深い。

では、こうした語り手の長い説明にはどのようにポジティブな見方ができるだろうか。まず、ひとつにはまさにこうして恋愛についてさまざまなたえを持ち出して説明すること、それこそ恋愛について語ることと作者が考え、聞き手もそれを期待していたであろうということである。つぎに、これも推測であるが、こうして実は深刻な状況にある二人を、「犬とウサギ」などにたとえることによって、語り手が物語の世界から距離を置いてそこにある種のユーモアを感じさせているのではないかということである。とは言え、そうした理由であれば、これほど長い説明を続ける必要はないであろう。とすると、気づくのであるが、この語り手の講釈のような長広舌の時間（語りの時間）が、物語の世界では無言のまましばらく続いたはずの時間（物語の時間）の経過を思わせることになっているということである。「そしてクリジェスはフェニスをそこから連れ帰る」(“Et Cligés Fenice an remainne”, 3803行) から「こうして彼らは自分たちの味方のところへ帰る」(“Ensi vers lor gent s'an revienent”, 3899行) までの90行ほどの語り手の講釈

の間、クリジェスとフェニスは無言の時を過ごしたというように。

4. アレクサンドル、ソルダモール、王妃グニエーヴル

クレチヤンの『クリジェス』が、恋愛感情の描写で注目されてきたのは、とりわけ恋する者たちの長いモノローグによるものであろう。従来指摘されてきたのは、4つ、順番に、ブルターニュへ向かう船中でのソルダモールのもの(473-521行、計49行)、ブルターニュ到着後のアレクサンドル、ソルダモールそれぞれのもの(624-870行の計246行、895-1044行の計150行)、そして遠くにいるクリジェスを思うフェニスのもの(4396-4560行、計165行)である⁸。しかももちろん他の、モノローグに類する一人の思いや語りや、恋する者どうしやあるいは第三者との会話においても恋について語られている。そこで、登場人物のディスクールについては、ストーリーの順序に従って順番に考察する。

1) ソルダモールのモノローグ(1)

はじめに出てくるのがソルダモールの船中でのモノローグである。実はこのモノローグで、すでに、あとの三つのモノローグにも見られる共通した特徴がうかがえるので、とくにこのモノローグのはじめの部分をそのまま引用する(引用はモノローグ全49行のほぼ半分の23行分)。モノローグは、先に指摘したように、まず語り手がソルダモールについて、アレクサンドルを思っ

彼女は言った「眼よ、あなたは私を裏切りました。

あなたのために、私の心は私を憎むようになったのです。

前はいつも私に忠実でしたのに。

ところで (Or) 私が見るものが私を苦しめます。

苦しめるって？ そんなことしません、むしろ私には好ましい。

それにもし (se) 私が私を苦しめるものを見ているとしたら、

それなら (Don=done) 私は自分の眼を支配下においてないということかしら？ (473-479行)

.....

もし (Se) 彼の美しさが私の眼に訴えかけ

そして私の眼がこの訴えを見ているということであれば、

それで私は彼を愛していると言えるのかしら？

そんなことはない、なぜならそれでは嘘になるでしょうから (mançonge)。(492-495行)

.....

私の心が望むものが私を苦しめるのです。

苦しめるですって？ 誓って、それなら (done) 私は狂っています (fole)

私の心によって私を傷つけるものを望んでいるのですから。

私の苦しみのもとになる望みなど、

私はきちんと取り除かないといけない、もし (se) できるならば。

もしできるならばですって。狂ってるわ (Fole)、私は何てこと言ったのかしら？

それなら (Donc) 私は自分になんの値打ちも認められないということね、

もし (se) 私に私自身を思い通りにする力がないのであれば!!

愛の神は私を導こうと考えているのかしら、

いつも他の人たちに道を間違えさせているのに？ (508-517行)

.....

私は決して愛の神のしもべにはならない、いままでもそんなことはなかった、

私は決して愛の神と親しくなることなど好むことはない。」

このように彼女は自分相手に議論し、

ある時は好きだと思い、またある時は好きではないと思うのだった。(520-524行)⁹

モノローグ全体のスタイルは、語り手がそれを「彼女は自分相手に議論し」(“Ensi a soi meïsme a tance” 522行) というように、自分相手に一人でする議論 (débat) である。それは、たびたび、「ところで」(Or)、「……ということであれば」(si)、「従って」(donc) といった語を使い、また自らに問いかけることによって、論理的に議論を進めていることからわかる。とくに特徴的な口調は、自分が発したばかりの言葉をすぐに繰り返して本当にそうかと自問する口調である。これは韻文の句末の語句をそのまま次の句のはじめに繰り返すという韻文のリズムによっても強調されている。そして、繰り返し自問した後は、「それは本当ではない」と強く否定するのに「嘘」「mençonge」、「嘘を言う」「mentir」という語が使われる(ほかのところでは、アレクサンドルの“j'ai manti” 651行、語り手の“je mant” 2802行など)。また、口にした事実を認められない時に、自分のことを「おかしい、どうかしている」という意味で“fou, folle”(「狂っている」)と呼ぶのは、むしろ論理的に考えようとしている態度の表れである。

モノローグが議論口調であるといっても論理の筋道をたどって何かの結論が出るとは限らない。ここではむしろ議論による結論は出ないこと、こうであればこうなるはずだという理屈を受け入れようとせず、否定することが特徴である。

議論の対象は、自分自身であり、その内容は、われわれの言葉で言えば、自分自身の心理の分析である。その流れをおおまかにたどるとこうなる。まず、眼が自分の意図しないもの(アレクサンドル)を見てしまうこと、そしてそれが苦しくもあり快くもあることを認める。しかし眼と自分自身とは別のものであるという理由から、いったん自分はアレクサンドルを愛していることにはならないと主張する。ところで、眼は心が望むものを見ているのであり、自分は心に対しては無力であるから、苦しみは取り去ることはできないことを認める。しかし最後に自分はこれまでと同様に愛の神に従うことはないと言明する。

要するに、議論に従えば、眼、心に次いで、つまりは自分がアレクサンドルに惹きつけられている、アレクサンドルを愛していることを認めることになってしまう、がそれを否定して、自分は愛の神には従わない、自分はアレクサンドルを愛することはないと言うのである。

こうした議論口調は、作者クレチヤンのような学僧にはお手のものであっても、ソルダモールのような貴族の乙女が口にするのはおかしいのではないかという疑問は今はそのまましておく。実はこの口調は他の3つのモノローグにも共通したもので、また時に語り手の口調にも見られるものである。だいたい、それぞれ日本語と違って、フランス語では、乙女のソルダモールの話すコトバも若き騎士アレクサンドルの話すコトバも同じもので、その口調からはだれのものかわからない。ともかくこうした自分自身の心理あるいは愛する相手の心理を分析し、一人で議論するところは、4つのモノローグに共通している。

2) アレクサンドルのモノローグ

さて、つぎに出てくるのがブルターニュ到着後のアレクサンドルのモノローグである。これは先にあげた4つのモノローグでも最も長い(計246行)。ここでも一人でする議論の口調で自分の心理の分析が進む。しかし、主題はときに自分自身のことから逸れて行く。だからモノローグが長くなってしまったのである。

アレクサンドルは、まず、思うことを口にはできない自分、病にかかっているが助けを求めようとしないう自分を「おかしい」(“fou” 624行)と認め、また薬も医者も役に立たない自分の病の苦しさを嘆き、ついにそれが愛の神によるものであることを認める(624-692行)。

しかしそこであらためて愛の神の矢についての話に及ぶと、なぜ矢は眼を通して心を射たはずなのに、眼を傷つけることはないのかと論証をはじめ。方法はアナロジーである。すなわち、眼は心の鏡であり、感情(“li sens” 713行)は眼を傷つけることなく通過して心を燃え上がらせるのだが、そのことはランプの中のろうそくの灯火がランプを傷めることなく、またステンドグラスを通して建物の中に入る陽光がステンドグラスを傷めることがないのと同じであると説明する(693-751行)。

そこで関心はまた自分自身に戻り、自分の眼と心の話になって、かつての自分の従僕であった眼と心がいまや自分の敵となったことを認める(752-767行)。

ところが次には「さてまた矢についてみなさんに話しましょう」(“Or vos reparlerai del dart” 768行)と、モノローグのはずが、まるで語り手のような口ぶりで、愛の神の矢をソルダモールの体にたとえて話す。すなわち、自分は矢筈と矢羽根しか眼にしていない、額や眼、鼻など、そしてのど、頸、胸までしか見ていない、胸から下や箆の中は見えていないのだ、とひそかな願望をのぞかせる。そして最後には、その矢のために自分は苦しんでいる、自分が愛の神に従う者であり、この病から治ることは望んでいないことを表明して終わる(768-870行)。

アレクサンドルのこのモノローグは先のソルダモールのモノローグを受けて、それとは対照的に、「自分は愛している」とはっきり認め、さらに「愛するのだ」との強い決意を示している。そしてソルダモールと同じように、愛の神について、眼と心と自分を区別して語りながら、愛の神に従うこと、自分の心が自分の敵となっていることを認めるものである。

しかし、モノローグの途中、愛の矢が目や鼻を傷つけないのはなぜかという議論、そしてソルダモー

ルの体の部分部分を「愛の矢」に対応づけてたたえるところは、あまりに雄弁すぎるようにも思える。「スタンドグラスを通る陽光」はマリアの処女懐胎を喩えるのによく使われるメタファーであり、「愛の矢」のアナロジーはフランス語の次代のアレゴリー文学作品でよく見られる列挙の手法の先駆け——ただし俗なものだが——とも言える（たとえばグローステストの『愛の城』1215-30頃）¹⁰。しかし、ここでも恋について語ることが恋する感情の表れであり、またこの長いモノローグこそ、アレクサンドルが過ごした眠れぬ長い夜の時間を思わせるものになっている。

3) ソルダモールのモノローグ (2)

このアレクサンドルのモノローグのあと、すぐに、相手側ではというようにソルダモールの二つめのモノローグが続く。一人でする議論、一連の自問自答によって、ここでは一段、一段と前是自己で否定していた恋をついに自覚していく過程がうかがわれる。

ソルダモールはまずアレクサンドルの美点を並べ、「自分が彼を嫌ってはいない」(“ne le hé je mie”, 913行) ことに気づき、「これが恋愛というものか」(“Est ce Amors?”, 924行) と自問し、ようやく「彼を愛している」(“Or l’aim”, 927行) ことを認め、ついに愛の神に従うことを表明する。と、ここでしばらく自分の名前「ソルダモール」(Sordamor) の意味に関心が移る。そしてこの名が「愛によって金に輝いている」(“soree d’amors”, 978行) ことを意味していることに気づくと、より積極的に「いつまでも愛するのです」(“toz jorz amerai”, 986行) と固い意志を示し、相手に恋愛の経験がなく、自分の気持ちが無駄になるかも知れない可能性を考慮した上で、さらに「彼が私を愛してくれなくても、私は彼を愛するのです」(“S’il ne m’aime, j’amerai lui.”, 1044行) と決意を表明する。

ここではもはや眼と心と自分自身をめぐる議論は出てこないが、まさに「愛」や「愛する」という言葉そのものによって気持ちの高まりが言い表されている。ただしここでも、「ソルダモール」という名前の意味をめぐる議論にしばらく時間を過ごすところ、名前こそ本性を現すと考えた中世の学僧のような考察がなされている。

4) ソルダモールのひそかな思い

さて、アレクサンドルとソルダモールは王妃グニエーヴルを交えた会話の中でお互いの気持ちを知るのであるが、その前にも、短くはあるが、ソルダモールが一人でひそかに思う、その思いが語られる場面がある。それは、たまたまアレクサンドルがそばに来合わせて話しかける機会ができたというのに、はじめに何と呼べばいいのかと「一人で考え」(“S’an prant consoil a li meismes” 1385)、けっきょくその機会を失うところである。名前前で呼びかけようか、それとも親しい関係でつかう「Ami」にするか、いやそれでは「嘘(間違っただい方)」(“mançonge” 1394) になるのではないかと迷う。ソルダモールのこの短いセリフでも、言葉を繰り返しての自問、嘘(間違い)という言葉による否定など、4つの長いモノローグと同じ口調になっている。

5) グニエーヴルとアレクサンドル、ソルダモール

その後、いよいよ王妃グニエーヴルがアレクサンドルとソルダモールを前にして話をし、二人

を結婚へと導く場面となる。しかし、注目すべきことに、直接話法になっているのは、グニエーヴルとアレクサンドルの言葉だけであり、ソルダモールについては間接話法的に彼女の言ったことが語られるだけであり、従ってアレクサンドルとソルダモールの二人が交わす会話は出てこない。

グニエーヴルは「アレクサンドルよ、愛は憎しみよりもなお悪いものです」と逆説的な言葉で始め（「« Alixandre, fet la reïne, / Amors est pire que haïne”, 2263 -64行）、恋愛について教育を授けようと言う（「D’Amors andoctriner vos vuel”, 2274行）。その教えとは、要するに、恋する者は自分の思いを隠していることによって相手を死なせてしまうこともある、だから勇気を出して告白し、そして結婚によって結ばれるべきであるとする考え方である。そしてまた、恋する者どうしの関係を言葉で説明することである。

グニエーヴルが、二人に対して、「あなたがたは二つの心を一つにした」（“de deus cuers avez fet un”, 2280行）と言って二人の思いを公にしたところで、ついにアレクサンドルはソルダモールに対する自分の思いを、ソルダモールに聞こえるように、しかしグニエーヴルに対して表明する、「彼女がなにもものも私に与えなくとも私は自分を彼女に与えます」（“S’ele de li rien ne m’otroie, / Totevoies m’otroi a li.”, 2312-13行）。するとこの言葉を受けたソルダモールの反応は語り手によって伝えられる。

この言葉に女の方は身震いし、この贈り物を拒絶することはなかった。言葉と態度で体を震わせながら自分の心の望みを明らかにした、すなわち、自分を彼に与え、そして意志と心と体をけって他の場所に置くことはない、またこの点で王妃の意志に背いたり王妃の命にさからうようなことはない。（A cest mot cele tressailli, / Qui cest presant pas ne refuse. / Le voloir de son cuer ancuse, / Et par parole et par sanblant / Car a lui s’otroie an tranblant, / Si que ja n’an metra defors / Ne volanté ne cuer ne cors / Que tote ne soit anterine / A la volanté la reïne, / Et trestot son pleisir n’an face. 2314-2323行）

こうして二人は王妃グニエーヴルを介してお互いの気持ちを確かめあうことができたことになる。そこでグニエーヴルは次のように言ってアレクサンドルに結婚を許可する。「アレクサンドルよ、そなたの恋人の体をそなたに与える。そなたが心のほうはすでに得ていることは知っておりますから」（“« Je t’abandon, / Alixandre, le cors t’amie; / Bien sai qu’au cuer ne fauz tu mie.” 2326-28行）。ここで、ことさら「心」と「体」とを区別していることは、つぎのクリジェスとフェニスの恋の問題の伏線となっている。

5. クリジェス、フェニス、テッサラ

1) フェニスとテッサラ

先に指摘したように、クリジェスとフェニスとが初対面の時からひそかにお互いを思うようになったことは語り手によって語られている。しかしこちらの二人については相手を思う長いモノ

ローグはフェニスのもを除いては無い。ただしフェニスのモノローグの前に、フェニスと養育掛のテッサラのディアローグがあり、そこでは、ちょうどソルダモールがモノローグを通して恋する自分を自覚したように、フェニスが自分の恋を自覚する（2984-3198行）。

テッサラはまず、様子のおかしいフェニスにどんな病気に苦しんでいるか訊ねる。フェニスは自分の病が苦しくもあり快くもあって、ほかのどんな病とも違うものだと訴える。するとテッサラはそれが「恋の病」（“max d’amors”, 3095行）であるといい、「あなたさまは愛しておられるのです」（“Vos amez”, 3103行）と、さらにその思いを打ち明けるように迫る。そこで、フェニスは「私の気にいっているお方は私が夫にしなければならない人の甥なのですから」（“Por ce que cil qui m’atalante / Est niés celui que prendre doi.”, 3122-23行）と恋の相手が誰かを白状する。しかし、また「トリスタンとイゾーの恋」（“L’amors d’Ysolt et de Tristan”, 3129）を引き合いに出し、「あの恋は道理にかなったものではなかったけれども、しかし私の恋はいつまでも不動のものとなるのです、なぜなら私の体と私の心は何があっても決して二つに分けられることはないからです。」（“Ceste amors ne fu pas resnable, / Mes la moie iert toz jorz estable, / Car de mon cors et de mon cuer / N’iert ja fet parite a nul fuer”, 3139-42行）と、先のグニエーヴルの言葉にあった、心と体とという言葉によって、この自分の恋の理想は実現不可能だと嘆く。こうして二人の間では、恋していること、そしてその恋の相手がクリジェスであることが明らかになると、後は、いかにしてこの危機を切り抜けるか、その方策の相談になる。

2) クリジェスとフェニス（別れ）

この場面の後、クリジェスがフェニスを救出して味方のところへ連れ帰る場面、無言の二人の思い、とりわけクリジェスの内気さを語り手が描写し、説明していることは先に述べた通りである。クレチヤンは、アレクサンドルには長いモノローグで心の内を語らせたが、クリジェスにはその機会を与えていない。しかし、次のフェニスに会って暇乞いをする場面で、重要な一言を言わせる。この短いディアローグの場面こそ（4291-4313行）、この物語ではじめて、互いにひそかに思いを寄せる男と女が言葉を交わす場面であり、しかもここではどちらもまだ思いをはっきりと伝えられない。

膝まづき涙を流すクリジェスに、フェニスはまず「あなた、お立ちなさい」（“« Amis, biax frere, levez sus!”, 4291行）といかにも親しい臣下に対する呼びかけで話をするように促す。そこでクリジェスも「奥方様」（“Dame”, 4299行）という呼びかけから始めてブリタニアへ行くことを話す。そして「しかし当然のこととして私はあなたさまに暇のお許しをいただかないといけません、私はすべてその方のものである、あなたさまをそういうお方として」（“Mes droiz est qu’a vos congíe praigne / Com a celi cui ge sui toz.”, 4312-13行）と言ったところで、言葉は途切れる。

3) フェニスのモノローグ

そしてこのクリジェスの別れ際の言葉「私がすべてそのお方のものである」の意味をめぐって

フェニスが後に考え悩む場面が、この作品で4つめとなる長いモノローグである。その言葉は自分への思いを告白したものか、それとも皇妃たる自分への追従によるものか。はじめこそ、「彼が私を愛していたのでなければ、自分自身を私のものだとは言わなかったということを私はこれから証明するのです」(“Proverai, se il ne m’amast, / Que por miens ne se reclamast;” 4407-08行)と意気込み、涙を流していたクリジェスの態度に自分を愛してくれている「様子」(“sanblanz”, 4436行)を見たつもりが、彼に会えない苦しみ募ると、「私を愛してはいないということは私にはよくわかっています、彼は私自身と私のすべてを奪い去ったのですから」(“Ne m’aimme pas, ce sai je bien, / Qui me desrobe et tost le mien.” 4451-52行)と自信を失くす。しかしそこからフェニスはクリジェスその人について語るよりも、クリジェスに付き従っていったままの自分の心についてずっと語る。私の心を無理にそこから連れ帰そうとはしない、私の心は従僕で、主人たる彼に忠実に仕えるのだというように。そしてそこから真に忠実な従僕と忠実さを装った悪しき従僕との比較となって話が少し逸れるものの、最後は私の心は良き主人クリジェスに仕えるのだと、クリジェスへの思いを確認する。

4) クリジェスとフェニス (告白)

そして後に迎えるのがクリジェスとフェニスがお互いの気持ちを確かめる場面である。ブリタニアへ武者修行へ出たもののフェニスを忘れられず帰国したクリジェスは、しばらくしてようやくフェニスの部屋で二人きりになる機会に恵まれる。話のきっかけを作ったのはフェニスであるが、フェニスの初めの言葉は間接話法で語られる。

フェニスは彼にまずブリタニアの話させた。……ついに彼女は気にかかっていたことに話を向け、かの地でどちらかの奥方か姫を愛するようなことはなかったか彼にたずねた」(Fenice a parole l'en mist / De Bretagne premieremant; / ... Tant qu'an la parole se fiert / De ce dom ele se cremoit: / Demanda li se il amoit / Dame ne pucele el pais. 5150-57行)

そこでクリジェスの言葉がつぎのように直接話法で始められる。

これにクリジェスは少しも困ることはなかったし、答えるのに手間取ることもなかった。彼女が声をかけるやいなや、すぐに答えることができ、「奥方」と彼は言った「かの地で私には愛する人がありました。しかしかの地の誰をも私は愛することはありませんでした。……」(A ce ne fu mie restis / Clygés, ne lanz de bien repondre; / Isnelemant li sot espondre, / Des que ele d'en apela: / « Dame, fet il, j'amai de la, / Mes n'amai rien qui de la fust. / 5158-63行)

そしてここからクリジェスとフェニスのディアローグとなる。結局のところ、互いに愛し合っていたということが確認されることになるのだが、どちらも最後まで直接的に「あなたを愛していた、愛している」とは言わない。そのかわり、ここでまた「心」と「私」、「心」と「体」の語を使ったレトリックが駆使される。要約すると、クリジェスが「自分はブリタニアに行ったが、

心はギリシアの外には出なかった、心はこちらにあって体があちらにあった」と言う、フェニスは「私はブリタニアへ行ったことはないが、心はブリタニアにあった」と言う。そしてつぎに、フェニスが「私の心はあなたがあちらへいた時にあちらにあって、あなたとともに出立した」という答えに、クリジェスが「私の心はあなたのところへ来たのです」と答えてようやく互いに相手への思いを告白しあったことになり、そしてクリジェスが「私の心はすべてあなたのものです」と言い、フェニスが「そしてあなたの方も私の心を所有しているのです」と言って、相手への思いを確認しあうことになる。また、ディアローグのはじめ、クリジェスは、心が自分から離れていた時のことを話すとき、自分を「(中の) 幹のない木の皮」(“escorce sanz fust”5164行) にたとえるが、これを受けてフェニスも「私の中には木の皮しかない」(“n’a mes fors que l’escorce” 5188行) と言う。

こうしたメタファーも含めて、この場面の二人のディアローグの特徴は「プレシオジテ」と呼ぶことができる。もちろん、ここで概念上の細かいニュアンスや歴史的関係を論じるつもりはない。ただ、「普通の言葉で言えることを難しい言い方で表現をする」ことは、ネガティブに評価することもできるし、また、「普通の言葉ではいえないからこそユニークない言い方で表現するのだ」とポジティブに評価することもできると思われる。この点は、後で語彙のレベルで考察するときにあらためて取り上げる。

5) フェニス

ひとたび互いの気持ち確かめられた後、物語としてはここからさまざまな事件が展開していくのだが、もはや語り手が二人の気持ちを長々と説明することはないし、また二人が恋愛感情について論じるモノローグや会話はあまり出てくることはない。

フェニスがクリジェスに、世間をだます策略を教えて、そうならば「私が自らを与えるあなたを除いて、私は一生、他のいかなる男の人にも仕えられることはない、あなたは私の恋人であり従僕となるのです。」(“Fors vos cui je m’otroi et doing, / Ja mes an testote ma vie / Ne quier d’ autre home estre servie. / Mes amis, mes sergenz serez;”, 5332-34行) と言うとき、それは強い愛情の表現というよりも、二人の関係を確信した上での、クリジェスへの励ましである。またフェニスは事情を知るテッサラに協力を求めるときに、「なぜなら、私は彼を欲し、彼もまた私を欲していて、私が苦しめば、彼もまた私の苦しみと私の苦悩のために苦しむのですから」(“Car jel vuel, il me revialt; / Se je me duel, il se redialt; / De ma dolor et de m’angoisse.”, 5413-15行) などと自分たちの思いを訴える。

6) クリジェスの嘆き

ただし、クリジェスが、フェニスが本当に死んだものと思ひ込み、動かぬフェニスの体を前にして嘆く、その短くはあるが伝統的な「死者への嘆き (planctus)」は、クリジェスのフェニスへの思いが直接話法で伝えられる唯一の場面として重要である (6220-47行)。そこでクリジェスはフェニスを「わが愛する人」(“m’amie” 6225行) や「やさしき恋人よ」(“dolce amie” 6228行)

と呼びかけ、「私はあなたより他に誰も愛してはいなかった」(“nule rien fors vos n’amoie”, 6240行) というように直接的な愛情表現を重ねる。しかしまた、「私はあなたの命を私の体の中に保っているのに、私の命はあなたの(死んだ)体の外にある」(“la vostre gart an mon cors, / Et la moie est del vostre fors,” 6243-44行) というように、この悲しみのきわみにあっても、あるいはだからこそ、先のクリジェスとフェニスの告白の場面にあったような、修辭的な逆説のセリフが出てきている。

6. 二つの恋

クレチヤンがこの『クリジェス』でアレクサンドル・クリジェス父子それぞれの二つの恋を描いたのは、クレチヤンの他の作品にも見られるように2部構成の物語を好んだからとも、またかのトリスタン伝説に合わせてここでもクリジェスの親の世代の物語からはじめようと考えたからとも推察される。

しかし、クレチヤンはただ漫然と二つの恋を時代順に語ったわけではなかった。似たような男女2組の恋でありながら、はじめのアレクサンドルとソルダモールの恋では告白こそ時間がかかるものの、それがただちに周囲からも祝福された結婚にいたる恋、二人が互いに心を与えあい、それが確認されればすぐに体を与えあうことのできる恋を理想として示した。その上で、つぎのクリジェスとフェニスの恋では、姦通の関係という障害のために、告白はさらに困難で、またそこから祝福された結婚までにさまざまな困難を経なければならぬ恋を描いた。しかし、はじめの恋では男女がともにモノローグで恋する思いを語りながらも、告白は王妃を仲介しての間接的なものであって、恋するものどうしが語る場面を描かなかったのに対して、あとの恋では、出会いから別れそして再会を果たした二人がついに自分の気持ちを相手に告白するという場面を設けている。

実際、物語の中で何度か出てくるモノローグやディアローグではあるが、二つとして同じ状況のものは描かれていない。ソルダモールの二つのモノローグは、はじめは恋の自覚の拒否であり、ふたつめは恋の自覚と決意という点でちがう。そしてアレクサンドルのモノローグは男による恋の自覚と決意である。クリジェスについてはそうしたモノローグは出てこない。フェニスの恋の自覚はテッサラとのディアローグでなされている。またフェニスのモノローグは、すでに結婚している女のものであり、未婚のソルダモールのモノローグとは、立場が異なる上、また内容もフェニスの場合はとくに相手の気持ちについて悩むという点で違っている。そして恋する二人のディアローグ、それは今も述べたようにアレクサンドルとソルダモールについてはなくて、クリジェスとフェニスについては2つ、はじめの短い場面では互いに思いが隠されていて、次の場面で遠まわしなからの告白となる。最後に、クリジェスの一人語りには、恋する相手がすでに死んでしまったものと思つての嘆きである。

このように作者クレチヤンは二つの恋を描きながらも、ストーリー、そして登場人物のディス

クールの点では冗長になるところを避けている。実際、先に指摘したように、同じ若い貴族の男女が同じような状況で語るフランス語となれば、どれも同じように表現が繰り返されることになったであろう。

『クリジェス』での恋についてのディスクールの大半は、自分自身の恋する心理を分析して表現しようとする、あるいは一般に恋の心理について説明しようとするものである。そのコトバは議論調で、AならばBであると議論を進め、BであるというのはAだからだと理由を説明し、またAであるかBであるかのどちらかであるからAであると大げさにいえば弁証法的な論法を使い、また時にはたしてAであるのかと自ら否定し、しばしばたとえ（アナロジー）によって論証する。

もちろん、実際には、そうした議論は本当の論証とは違って、しばしば行きつ戻りつし、脱線し、細かい議論にこだわってわかりにくくなってしまふ。そうした議論調のディスクールが当時の若い貴族の男女にとってリアルなものであったかと考えれば、やはり、これは物語の中のコトバであって、そっくりそのまま現実のものであったとは想像しがたい。Frappier は、クリジェスとフェニスの二度のディアログについて、「二つとも、当時の貴族社会にとっては社交的な恋の会話のモデル (modèles de conversation mondaine et amoureuse) に思えたに違いない」と言っている¹¹。それはおそらく、そこまで長いやりとりはしなくとも、たとえば「愛する」というのに、「心があなたにつき従う」というような表現は使ったであろうということである。しかし、それは、「愛する」という感情があり、それを「愛する」という言葉で言えば言えるところを、あえてわざわざ「心」という言葉を使って回りくどい言い方をしたとは必ずしも言えないであろう。むしろ言葉にできない感情を「心」というコトバを使ってはじめて自分でも理解できるというようなものではなかったかと考えられる。

たとえば、結局、この物語では、主人公たちが恋する相手に自分の思いを伝えようとして「Je vous aime.” (私はあなたを愛している) という場面はない¹²。ソルダモールにとって、恋のはじまりとはまず自分がアレクサンドルを好きになっていることを認めることができるかどうかにある。はじめのモノログで「だからといって私は彼を愛していると言っていいのだろうか」(“Dirai ge por ce que ge l'aim?” 494行) と自問しているのは、まずアレクサンドルに対する何ともしがたい感情があって、その感情を“aimer”という言葉で言い表していいものだろうかと考えているのである。そして次の恋を自覚するモノログでは、「これは恋かしら? ええ、そう思うわ」(“Est ce Amors? Oil, ce croi.” 924行) と、まさに“amour”という名詞でその感情を呼び、すぐあとに「では私は彼を愛している」という時 (“Or l'aim.” 927行)、この表現は「愛している」という事実を認める以上に、感情をそのままに表現したものである。彼女はさらに「私は愛することを望みます」(“Or vuel amer” 944行) と言い、モノログの最後が「彼が私を愛してなくても、私は彼を愛するのです」(“S'il ne m'ainme, j'amerei lui.” 1044行) とあるように、「愛する」は願望や意志の表現にもなっている。こうした表現では、誰を愛するのかという点は2次

的なものである。だからテッサラがフェニスに恋の自覚を迫る会話でも、相手が誰かということよりもまず「愛している」という事実を強調して、「だからあなたさまは恋しておられるのです」(“Donc amez vos” 3097行)、「あなたが恋していることを私は確信しています」(“Vos amez, tote an sui certaine” 3103行)と言っている¹³。しかし、すでに指摘したように、クリジェスとフェニスが互いの気持ちを打ち明けようとするときには、直接的な“aimer”という動詞を使うことはない。

この作品で、恋する思いは、直接的にこの“aimer”という動詞を使わず、あるいは「愛の神が私を攻撃する」とか、「私はあなたのものです」とか、あるいは「私の心はあなたと共にあります」、「私の心はあなたのものです」などと表現されている。こうしたさまざまな表現があり、それは一方では語彙のレベルの問題になるが、“J'aime.”という言葉が状況によって事実や感情あるいは意志の表現となっているように、ディスクールのレベルでも意味が違ってくる。このディスクールのレベルも含めた、『クリジェス』における恋愛に関する用語・表現の考察については、稿を改めて論じるつもりである。

註

- 1) 本稿では特に断りが無い限りはWalter版(éd. Philippe Walter, in *Chrétien de Troyes, Œuvres complètes*, Coll. “Pléiade”, 1994)に従う。必要に応じてMéla-Collet版も利用する(éd. Charles Méla et Olivier Collet, in *Chrétien de Troyes, Romans*, Coll. “La Pochothèque”, 1994)。『クリジェス』の写本には二つの系統が推定されているが、Walter版はB.N. ms. fr.794、Méla-Collet版はB.N. ms. 12560と、それぞれのグループの代表的な写本を底本としている。
- 2) ちなみに『クリジェス』には“amour naissant”というそのままの表現はないが、「恋が生まれ成長する」(“amors acroist et nest”, 594行)という表現がある。
- 3) Jean Frappier, *Chrétien de Troyes*, nouvelle édition, Paris, 1968, p.105.
- 4) Jean Frappier, *Le roman breton, Chrétien de Troyes: Cligès*, Paris, 1951.
- 5) クレチヤンの恋愛観・結婚観については、Peter S. Noble, *Love and Marriage in Chrétien de Troyes* (Cardiff, 1982)がある。
- 6) Dembowskiはクレチヤン・ド・トロワがこうした作者(語り手)の位置を十分意識した物語作家であったことに注意を引いている。Peter F. Dembowski, “Monologue, Author’s Monologue and Related Problems in the Romances of Chrétien de Troyes”, *Yale French Studies*, 51, 1974/75, 102-114.
- 7) G. Paris, *Mélanges de littérature française du Moyen âge*, 1912, p.295, n.1.
- 8) Jean Frappier, *Le roman breton, Chrétien de Troyes: Cligès*, “Les Cours de Sorbonne”, 1951. Dembowski, *op. cit.*, p.106-107.
- 9) Et dit: «Oel, vos m’avez traïe; / Par vos m’a mes cuers anhaïe, / Qui me soloit estre de foi. / Or me grieve ce que je voi. / Grieve? Nel, fet, ençois me siet, / Et se ge voi rien qui me griet, / Don n’ai ge mes ialz an baillie? ... Se sa biautez mes ialz reclainme / Et mi oel voient le reclaim, / Dirai ge por ce que ge l’aim? / Nenil, car ce seroit mançoenge. / ... Sa volentz me fet doloir. / Doloir? Par foi, donc sui je fole, / Quant par lui voel ce qui m’afole. / Volantez don me vaigne enuis / Doi je bien oster, se je puis. / Se je puis? Fole, qu’ai je dit? / Donc porroie je molt petit, / Se de moi puissance n’avoie! / Cuide moi Amors metre an voie, / Qui les autres sialt desveier? / ... Ja n’i serai n’onques n’i fui, / Ne ja n’amerai s’acointance.» / Ensi a soi meïsmes tance, / Une ore ainme et autre het. (473-523行)

- 10) 拙稿「リュトプフの作品におけるアナロジー表現について」(『名古屋大学文学部研究論集』文学47, 2001)、および「列挙のアレゴリーと記憶術」(『名古屋大学文学部研究論集』文学47, 2001)でもとりあげた。
- 11) Jean Frappier, 1951, p.120.
- 12) 実は、本作品でも“Je vous aime.”というセリフが2度出てくる。一度は、フェニスとクリジェスの告白の場面の終わり、フェニスが「私があなたを愛し、あなたが私を愛しているといっても、そのためにあなたがトリスタンと呼ばれたり、私がイズーだというようなことになってはいけません。」(“Se je vos aim et vos m'amez / Ja n'en seroiz Tristanz clamez / Ne je jan serai ja Yseuz”, 5243-45行)というところ。ここはすでにお互いの気持ちがわかった上で、それを確認しているところ。もう一つは、フェニスと養育掛のテッサラに「あなたはこれまで私にたくさんのことをしてくれたので、私はあなたが大好きです」(“Tant m'avez fet que molt vos aim”, 5403行)と協力を求める場面。この場合は“aimer”といってももちろんクリジェスに対する思いについて言うのとはニュアンスが違う。だからこそ当人に直接言えるのである。
- 13) なお形容詞の“amoureux”は『クリジェス』のWalter版でも、Méla-Collet版でも出てこない。

Abstract

Comment parle-t-on de l'amour dans *Cligès* de Chrétien de Troyes?

Hiroshi UEDA

Chrétien de Troyes décrit la psychologie de l'amour dans *Cligès* en racontant deux amours l'un après l'autre: l'amour d'Alexandre et celui de son fils Cligès.

L'amour du père est un amour modèle où les aveux conduisent les amants au mariage légitime, alors que celui du fils, amour adultère, doit surmonter des obstacles pour aboutir à une aussi heureuse issue.

Le narrateur indiscret analyse les sentiments des amants et discute sur la nature de l'amour en se mettant à distance par rapport au récit.

C'est surtout dans les discours des personnages sur l'amour que Chrétien déploie son talent romancier: les monologues des amants sont construits sur un style commun, débat intérieur, avec des tons différents; le dialogue de Cligès et Fénice est une conversation précieuse recherchée, etc.

Les discours sur l'amour dans ce roman pouvaient être des modèles de conversation pour les jeunes aristocrates de l'époque. Ceux-ci apprenaient à aimer avec le langage d'amour. L'amour ne naît-il pas avec le langage?